真言教学における生死観

――『宗骨抄』を中心として――

中村本然
（高野山大学）

一　問題の所在

この世に生を受けたあらゆる人に必ず訪れることとして死がある。死に対する対応は仏教者ならずとも無関心では済まされないことといえよう。ところで真言宗を開いた空海（七七四～八三五）にあっては、現世における成仏に注目することもあり、その対極にある死に関する記述はあまりみられない。真言教学において生死が話題となり始めるのは、末法思想が蔓延しつつあった平安後期とみられ、この頃より真言末徒によって「尋常行儀」や「臨終用心」等の論考が提出されるようになる。この度の報告では、浄土信仰が民衆の間で広まりはじめるこの時期に、特に安心論との関わりにおいて真言教学の生死観を提唱した憲深に注目し検証することにしたい。

二　憲深撰『宗骨抄』に説かれる生死

浄土思想が流布する中で真言密教の立場から秘密念仏思想を構築するにいたった人物に道範（一一七九～一二五二）

がいる。道範の『秘密宗念仏鈔』所収の「臨終用心事」には、生死に関する論及が散見する。真言密教における生は不生の生を基盤として、別に生じ来たることはない。同様に死は不滅の滅であり、本源を離れて去り滅することはない。即ち阿字の縁起によって生じて有ることを生とし、本不生の空に還元することを死としている。(1) このように真言密教では生滅変化するように映る生死の相も本不生なる阿字と別にしてあり得ない。

その道範と時期を同じくする醍醐寺の僧に憲深（一一九二～一二六三）がいるが、彼は『宗骨抄』を著している。(2) 奥書には、室町期の真言僧隆増（年代不詳）による消息が残されている。

師主の云わく。此の聖教、自門と為すと雖も、一流付法の嫡家に非ざる者に、授くべからず。若し此の旨に背いて非器に授くる仁者、清瀧の御罰を蒙りて、現世には法の冥加尽き、後世には地獄に堕すべし云々(3)

私に云わく、成賢御住の時の御口説なり。此の一巻は報恩院最極深秘の書なり。他見に及ぶべからず云々

『宗骨抄』には真言や𑖀字など、真言密教の基本的な理念が綴られ真言宗の教義書とされるが、一流（報恩院）の流れを汲むもの以外には授けてはならないと明記される。それに違背して伝法の機根にない者に授ける阿闍梨は、清瀧権現の罰を蒙ることになり、現世での加持護念から洩れるばかりでなく、後の世で地獄に堕ちることになると記している。この『宗骨抄』中の教義には、憲深の師である成賢（一一六二～一二三一）の口訣が披露されており、法恩院流においては最極深秘の書とされる。努々この流派にある人を除いて披見させてはならないと誡めている。

三　一期終命の生死

『宗骨抄』には、生死に関する論考として「流来生死大事」がある。この中には、真言行者が生死から脱れて安心

を得ることについての解明がなされている。ともあれ憲深は、生死に一期終命の生死と刹那無間の生死の二種がある[4]という。

まず一期終命の生死とは、命運によってこの世に存在することを生といい、運命が尽きて他の法界に移ることを死という。一般的にいわれる衆生の生死である。

この一期終命の生死に、様々な疑義が扱われる。まず一期終命の後に他の法界に生じることについて、心識の依り所となる業報の依身を得てから他法界に生じるのか、という疑いである。憲深の質疑に関する対応は以下のとおりである。

> 真言者此の𑖀𑖽𑖿の深密の教法に値うて、自心是仏の道理を印持決定し、其の後、何ぞ業報所感の身を生ずと云うべき耶。是れ則ち聖果の上の化他利物の生死なり。然れば則ち真言行人、自心即万徳輪円の具徳、諸仏最要の秘蔵なり。一念発起して後、全く自の生死を念ぜず。只、一向に他の衆生を利せんが為に、此の不思議を悟ると雖も、無辺の生死を受く。然りと雖も、受生進退の故に遍法界悉く月輪なり。何くへ去り何くへ行かん。十界悉く𑖀字なり。何の界を厭わんや。唯だ生死を厭い涅槃を欣うは、初心始行未練の行者なり。深く之れを思うべし。[5]
>
> 云々

真言行人は、瑜珈の深遠なる教法である密教に出逢うことによって、自心是仏の教理を体得し決定することになる。何故に業報所感の依身を生ずることになろうか。真言行人の生死は聖果の後の化他方便としての生死にほかならない。自心即万徳を顕現せる真言行人は輪円の徳を具有しており、諸仏の最も肝要なる秘蔵とされる。よって密教の教えに一念を発した後は、自らの生死について思念し憂慮することはない。只ひたすらに衆生教化のために、甚深にして不

可思議なる境涯を悟っていても、多様な生死の相を方便として示現することになる。ともあれ受生・進退を呈する法界はすべて月輪の範疇にあり、何処へ去り何処に往くことはない。十界は悉く阿字であり、本不生の境界である。十界のいずれの界を厭い遠離することがあろうか。流転せる生死を厭い、常住なる涅槃を乞い願うのは、修行を始めた初心の者にほかならない。

抑も何故に真言行者は命終に際して他法界に趣く時に、五大の依身を脱ぎ捨てるようにうけとめられるのであろうか。

問う。真言行者、受生進退して。他法界に趣く時、五大の依身を捨すと見たり。若し爾らば、六大の中、五大は此の界に留まり。識大の心法ばかり他界に生ずと意得るべし耶。若し爾らば、今生所果の五大は、父母始めて之れを荘厳して依身に儲かる時、自心能住の心法ばかり行きて之れに坐する歟哉(6)

もし指摘されるようであるならば、六大中の五大は此の世界の留まり、識大の心法のみ他界に生じることになろう。或いは今生で得る五大は、父母が始めて荘厳して心識の依り所となる身体を儲ける時に、自心能住の心法に五大が備わることになるのであろうか。

『宗骨抄』に窺う憲深の立場は次のようである。

答う。此れ等の不審は、未だ六大を知らざる前の疑なり。所謂自心の心法、識大とは、則ち我等が出入の命息なり。息風は即ち魂神なり。此の心法の魄神に六大を具足するなり。則ち此の命息風、萬物を吹き撥う徳有り。是れ地大なり。堅性の故に云々　此の命息、湿性有り。是れ水大の徳なり。此の出入の命息に煖気あり、是れ火大の徳なり。此の命息、虚空に出でて、廻転自在なるは空大の徳なり。此の命息、衆生の魂神と成りて了別の性有

り。是れ識大の徳なり。此の息風、当体即ち風大なり。我等が四威儀動作、念念声声、此の息風の得る力なり。是くの如く道理必然の故に、我等が命息の心法に六大を具足して、忽ちに其の所念の趣形を建立するなり。全く父母、始めて此の五大を造るに非ず。只、自心の六大を以て、又他界の六大を建立す。形には差別有りと雖も、本より六大をば具す。全く差別無し。(7)

このような不審は、真言密教にいう六大の概念を熟知していないための疑いである。自心の心法である識大とは、衆生の出入の命息のことである。息風は魂神であり、この心法の魄神に六大を具足している。則ち命息の風には万物を吹き払う常住不滅なる徳が備わるが、これは堅性なる地大の徳である。この命息に湿性があるのは水大の徳であり、また出入の命息に暖かな煙気がみられるのは火大の徳である。また命息が虚空に放たれ流転し自在なる様は空大の徳にあたる。命息が衆生の魂神となって、了別する性格を有するのは識大の徳である。命息の当体が六大中の風大であることは論を俟たない。衆生の行住坐臥の四威儀の動作や念々に起こされる声は息風によってなされる。このように我等衆生の命息の心法に六大を具足して、念ずる所に応じた様相を形成している。従って父母の交流によって始めて五大が造られるのでなく、自心本有の六大によって他界の六大が建立される。その形成される六大には差別はみられても、本質として六大を具有しており、決して差別相はないといえよう。

今世において生じた五大を捨離することについて憲深は、

但し、眼前に今生所果の五大を捨する事について、異熟の身ばかり捨つるなり。譬えば一切草木の種子、春の縁に遇うて生長せんと欲する時、其の皮甲を捨つ。然りと雖も、秋来たれば本の如く皮甲を具足するが如し。真言行者、他界に生じる時、異熟・依身の五大を捨する事、亦是の如し。若し此の道理。必定せば六大倶時に母胎に

行趣して入胎すべきなり。此れ等は宗の大事にして、師授に依り胸中に収めて全く口外に出でざるなり。然りと雖も末世の鈍心を誘引せんが為に、懐中に之れを記す。穴賢穴賢。余の五大に各六大を具する事、常用に非ざるが故に、之れを記さず。[8] 云々

と、異熟の身を捨てる意に解釈する。譬えば、一切の草木の種子が、春の季節の訪れとともに芽吹く時に、種子を覆っている皮甲を捨てる。やがて秋を迎えると実を結び、再び皮甲を帯びた種子となる。このように真言行者が他界に生じる時に異熟・依身の五大を捨て去るのも同じである。この道理のように必定して六大を俱なう時に、母胎に行き趣いて入胎することになる。これは真言宗の大事にして、師の伝法によって授けられた後は、胸中に密かに収められて口外されることはない。しかしながら、末法の世の鈍根の修行者のために、敢て記しておくことにする、とその胸の内を告白している。

真言行者が、流来生死を離れた生を受けることは承知したが、それでは何故に生死の業を離れることはなく、生を受け進退するようにみえるのであろうか。

答う。流来生死の業は、影像に依る。本有受生の生死は鏡の本質に由る。鏡、本より萬像を現ずれども、その本質、全く実無し。影業、実智を知らざる時は、本質を忘れて影像に依る。故に流来生死如実知の息の時、本質に契当するが故に、影像の衆業、皆、本質に帰して引業すべからず。之れを知るべし。[9] 云々

憲深は、鏡の本質と影像との関係による説明を試みている。即ち流来生死の業は鏡に映る影像であり、本有受生の生死は鏡の本質に相応する。鏡は性質として万像を映し出すが、その鏡の本質には万像は存在しない。鏡に映る影像に執われて真実智を解しない時には、しばしば影像を本質と誤認する。流来生死について実の如く知る命息と相応す

る時には、本質に契合することになり、影像のあらゆる業は本質に帰して生死流転の引業とならない。

ともあれ憲深は末法の世に生きる鈍根の修行者に悲哀の情を抱いていたようである。多くの衆生は父母の赤白二水によって生じながらも、終に二水の本源を知ることはなく、生死に流転してとどまることはない。上根の機根の衆生ならば、父母から生じた当初より所縁の境に対して貪愛や瞋恚の二心を起すことはなく、清浄なる朝に清らかな法水を身に注ぎ、寂静なる黄昏にはそのことを心に描き、父母から生じたこの凡身を捨てることなく、神通力を体得して、如来の大空の境地に遊ぶことができる、と明かす。そしてこの身を捨てずして即身成仏することについて、一期の間に自心を毘盧遮那如来と観じることであり、命終の時に凡身を離散して、やがて命息の自心の本源である大空位に住することになると述べている。(10)

四　刹那無間の生死

続いて刹那無間の生死について、憲深は以下のように論じる。

次に刹那無間の生死とは、一切衆生の命息、皆、虚空の天命を以て各々命息と為す。然るに十界の衆生、虚空の一円明の風気を、分々に其の身体の大小に随うて自心中に引入するを自引命息と為す。即ち此の命息の内へ引き入る息、生と云うなり。其の故は法界の一円明の風気を、自心五大の家に引き入れて、我が生を続くが故に生と名づく。此の息風、自身の五大の家を出でて、虚空界に住するが故に是れ死なり。此れを去り彼に行くが故に、是れを入我我入とも名づく。此の生死は、十界の衆生、皆、内薫の密益有り。互いに主伴と為す。(11)

あらゆる衆生の命息は、すべて虚空の天命を命息とする。従って十界に存在する衆生は、虚空中の円明の風気を、

個々の身体に随って自らの心中に引き入れて自引命息とする。つまり生とは虚空の天命を引き入れる息をいう。法界の一なる円明の風気を自心の五大中に引き入れて自らの生が続くことを生という。またこの命息の風が自身の五大から離れて虚空界に住することを死という。虚空界の命息が自心に入り、また虚空界に離れることを入我我入と名付ける、と釈明している。

憲深がいう虚空の一円明とは、何であろうか。『宗骨抄』には

> 彼の虚空の一円明とは、即ち十界の衆生の吹き出す命息、聚集せる天命なり。此の聚集せる天命の一分を、十界随一の衆生の自心の中に引き入るる時、十界の衆生に差別体有りて、各々不同なり。他界の衆生、善心を起こして虚空に命息を吹き出だす。自心の中に引き入るる時、我等に塔廟飯食沙門等の無量の慈悲善心、起ること有り。又他界の衆生、悪心を起こして虚空に命息を吹き出だし、自心中に引き入るる時、我等に殺生偸盗等の諸悪業有り。(12)

とあり、虚空の一円明とは、十界の衆生の吹き出す命息にして、それらが聚集する天命のことをいう。天命の一分を、十界中の衆生が自心に引き入れる時に、十界の衆生には様々な差別がみられ、それぞれに異なり一様ではない。例えば、他界の衆生が善心を起して虚空に命息を吹き出す。その命息を自心に引き入れる時には、無量の慈悲や善心が起こる。また他界の衆生が悪心を起して虚空に命息を吹き出し、その命息が自心に入ると、殺生や盗み等の悪業を繰り広げることになる。

> 此の如く真実の𑖀字の妙法を心に懸けて、行住坐臥に間断せず、生死にも恐れず、涅槃にも住せず。之れを以て大覚と名づく。亦た証果の聖人と名づく。更に異求すべからず(13)云々

そのような次第であるから、真言行人は𑖀字本不生の妙法を心にかかげて、行住坐臥において間断することなく、更に生死をも恐れることがないように勤めるべきである。例えば涅槃に住しても決して執着してはならない。この境地を大覚と名づけ、証果の聖人とも名づける。つまるところ阿字本不生の本源以外に求めてはならない、と『宗骨抄』で明かしている。

五　『宗骨抄』所説の𑖀字について

『宗骨抄』の「𑖀字萬法総体事」には阿字について、

> 夫れ𑖀字とは萬法の根源。法界の像質なり。是れを以て萬法の生ずるも即ち阿字縁起の生なり。法界の滅するも𑖀字随縁の滅なり。然れば則ち有体無形も𑖀字の当体ならずということなし。諸の言音名字も亦、皆悉く𑖀字の声字なり。(14)

と、本不生を内容とする𑖀字は万法の根源にして法界すべての影像の本質である。一切の万法は阿字の縁起によって生じるものであり、法界の生滅変化は阿字の随縁相である。随縁の有体・無形の相は阿字本不生を離れるものではない。あらゆる言音や名字もまた𑖀字の声や字の所現である、と明かす。

また地・水等の五大の音韻、色塵などの六塵の文字、十界依正の三千の諸法のいずれも四十七の悉曇の言語の範疇にある。この悉曇は𑖀字を能生の母として無量に流出する。このように一切の諸法は諸仏菩薩の作すべきものではなく、法爾の道理にして天然の言音である。草木国土もこの悉曇を依り所としており、人・天・鬼畜といえどもこの𑖀字を離れることはない。従って山野の禽獣もおしなべてこの悉曇を唱え、草木や虫類も皆𑖀字を呼ぶのである。草木

及び金石もすべて此の音を帯し、菩薩や声聞も悉くこの声を誦ずるのである。譬えば権仏・実仏も併せてこれを証し、実相を説いている。この道理を実の如く知らざれば自縛して奈落に入ることになり、実の如くこれを覚れば自ら証して菩提に至ると主張している。(15) 続いて『宗骨抄』には

所以に三界所有の言語も皆𑖀字の言語なり。十界所有の音声も悉く𑖀字の声字なり。声字義に云く。且く梵本の初めの𑖀字、口を開いて呼ぶ時に𑖀の声有るは即ち是れ声なり。𑖀の声は何れの名をか呼ぶ。法身の名字を表す。即ち是れ声字なり。法身は何の義か有る。いわゆる法身とは諸法本不生の義、即ち是れ実相なり。文　即ちこの意なり。(16)

と、空海の『声字実相義』を用いた論証がなされている。即ち欲界等の三界の言語も六道輪廻を含んだ十界の声字もすべて𑖀字の言語であり声字である。まさしく『声字実相義』に説示されるように、梵語の初めにある𑖀字についていうならば、口を開いて声を発する時に𑖀の字が生じるのであるが、これが声である。この𑖀字は一体如何様な名を呼ぶのかといえば、法身の名字を表している。これが声字である。それでは法身にはどのような義が有るのかというに、法身には諸法本不生の意味があり、それはそのまま実相を表詮するのである。

六　観法としての𑖀字観（九重阿字）

真言密教の特徴は、理論とその具現としての実践法の提供にある。即ち阿字本不生の教義に併せて、それを体得するための具体的な修行法が論じられるところに特異性がみられる。『宗骨抄』には、阿字に関する詳細なる理論の構築とともに、阿字観とも密接に関わる「九重月輪観」について詳述している。九重の月輪に関して、憲深は三説を紹

介する。

問う。真言行を修する者、九重月輪を観ずと見たり。其の月輪の九重なる、方に如何。

答う。月輪の九重に於いて三説あり。共に皆、説かれる所、分明なり。其の三種の様、或いは八葉の如く九重なり。是れ尊勝破地獄軌に由る。或いは月輪の九重、繞りて重ぬ。青龍軌に由る。或いは竪に九重なり。九識と之れ習う。塔の九輪と之れ習う。同じ事なり。善無畏の尊勝破地獄儀軌に云わく。九重月輪は八葉九尊の義を表す。[17]

文

真言の行を修する者は九重の月輪を観想すべきであるが、それは如何なるものであろうかという発問に応じて左記のような答弁が導き出されている。月輪の九重については三説があり、その思想的根拠については明瞭にされている。

一には、八葉の蓮華のように、月輪を中心として九つの月輪を観想する説である。これは善無畏（六三七～七三五）訳の『仏頂尊勝心破地獄転業障出三界秘密三身仏果三種悉地真言儀軌』所説の「九重月輪は八葉九尊を表す[18]」に基づき、胎蔵生曼荼羅の中台八葉九尊のように、大日如来に擬える阿字を描いた月輪を中心に、そのまわりに八つの月輪を配して観想する説である。

二つには、少しずつ大きさが異なる月輪を九重に観想する説である。これは大中年間（八四七～八五九）に法全（生没不詳）が青龍寺で著した『大毘盧遮那成仏神変加持蓮華胎蔵菩提幢標幟普通真言蔵広大成就瑜珈』に説かれる「輪圍九重なり。虚圓にして白なり[19]」や諭婆迦羅訳『摂大毘盧遮那成仏神変加持経入蓮華胎蔵海会悲生曼荼羅広大念誦儀軌供養方便会』所説の「厳整水輪中　輪圍成九重[20]」を理論的根拠とする説で、月輪を山のように重ねて観想する行法である。

三つには、形や大きさの等しい月輪を塔のように竪に九つ並べて観想する説である。

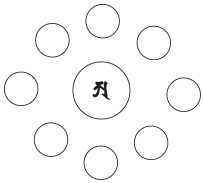
私に云わく、其の形・大きさ皆同じ

師の云わく、此の様は別に未だ本説を勘えず。只、先の説文の異を以て此の如く観ずる歟。此の九重月輪とは。土器を九つ重ねたるが如く観ずるなり。是れ九識、転じて法門の表示として事相に顕わす時。塔の上の九輪是れなり云々[21]

憲深の師である成賢はこの観想については理論的な解明をされていないと告げている。その上で、二つ目の観想の異説として修された可能性を示唆している。ここにいう九重の月輪観とは、土器を九つ重ねるように行なう観法である。これは九識を転じることを説く真言密教の教理を、塔の上の九輪として観念するものである。

三種の観想法を図示すると左記のようである。

①〈尊勝破地獄軌〉説



②〈青龍軌・摂大軌〉説

③異　説

七　まとめ

真言教学における生死観について、醍醐寺僧・憲深の著した『宗骨抄』を通して考証した。

真言教学史上に秘密念仏思想を提唱した道範は『秘密宗念仏鈔』所収の「臨終用心事」の中で生死について考究し、生は不生の生、死は不滅の滅であり、阿字本不生の縁起によって有として生じることを生とし、本不生の空に還元することを死と扱っている。道範と時期を等しく生きた憲深は、生死を二種の視点から解釈する。一期終命の生死と、刹那無間の生死である。一期終命の生死は一般にいう臨終における生死であり、刹那無間の生死は日々刻々における生死である。

『宗骨抄』には、臨終時の業報の依身や六大（縁起）などに関する質疑が寄せられるが、憲深は六大法爾常住の教義による論証を行なっている。即ち通常、目に映る生死の相は、真言行人においては仏果後の衆生化他のための方便とする。阿字は十界の根源であり、十界はすべて本不生の境界の範疇にある。何故に十界のいずれの界を厭うことがあろうか、と言い放っている。また命終に際して、真言行人があたかも五大の依身を脱ぎ捨て、他法界に移行するようにみえるのは、真言密教の六大（思想）について充分に熟知していない証左と言えよう。自心の心法である識大は、衆生の出入の命息のことであり、心法の魄神に六大が備わるのである。この命息の風は万物を吹き払う常住不変の地大の徳、命息の湿性は水大の徳、暖かな煩気は火大の徳、虚空にあることは空大の徳、衆生の魂神として了別する性質は識大の徳、命息の当体は風大の徳である。このように我等衆生の命息の心法は六大を具足して、念ずる所に応じた様相を形成している。

また刹那無間の生死に関して憲深は、十界のすべての衆生は、虚空中の円明の風気を、個々の心中に引き入れて（自引）命息としている。即ち法界の一なる円明の風気を自心の五大中に引き入れて自らの生が続くことを生といい、この命息の風が自身の五大から離れて虚空界に住することを死というと規定する。

『宗骨抄』には生死観の基となる阿字について、阿字本不生は万法の根源にして法界すべての本質である。一切の万法は阿字の縁起によって生じ、法界の生滅変化の様相は阿字の随縁相に過ぎない、という理解を示している。従って地・水等の五大の音韻、色塵などの六塵の文字、十界依正の三千の諸法のいずれも四十七の悉曇の言から派生し、しかもこの悉曇は𑖀字を能生の母として無量に流出することになる。草木国土もこの悉曇を拠り所とし、人・天・鬼畜といえども𑖀字を離れることはない、と論じている。

真言密教の特徴は、理論とその具体的な実践行にある。『宗骨抄』には、阿字の教理とともに、阿字観と密接に関わる「九重月輪観」について紹介する。憲深当時には、九重の月輪に関して三種の説が唱えられていた。①八葉の蓮華のように、月輪を中心として九つの月輪を観想する説、②少しずつ大きさが異なる月輪を九重に観想する説、③形や大きさの等しい月輪を塔のように竪に九つ並べて観想する説である。

ともあれ憲深が識別して説いた一期終命の生死と刹那無間の生死に呼応するように、多くに密教者によって臨終用心と尋常行儀の心構えや修行方法などが撰述されている。時代の推移に呼応して、真言密教の生死観の基本概念である阿字本不生は、より洗練された阿字の理論や阿字の観法として構築されていく様子が窺われる。

註

（1）『秘密宗念仏鈔』〈『真言宗安心全集』下・二六四〉
（2）『宗骨抄』〈『真言宗全書』22・一七七～〉
（3）『宗骨抄』〈『真言宗全書』22・一九一a〉
（4）『宗骨抄』〈『真言宗全書』22・一八七b〉
（5）『宗骨抄』〈『真言宗全書』22・一八八a〉
（6）『宗骨抄』〈『真言宗全書』22・一八八a～b〉
（7）『宗骨抄』〈『真言宗全書』22・一八八b〉
（8）『宗骨抄』〈『真言宗全書』22・一八八b～一八九a〉
（9）『宗骨抄』〈『真言宗全書』22・一八九a〉
（10）『宗骨抄』〈『真言宗全書』22・一九〇a〉
（11）『宗骨抄』〈『真言宗全書』22・一八七b〉
（12）『宗骨抄』〈『真言宗全書』22・一八七b～一八八a〉
（13）『宗骨抄』〈『真言宗全書』22・一八八a〉
（14）『宗骨抄』〈『真言宗全書』22・一八〇b〉
（15）『宗骨抄』〈『真言宗全書』22・一八〇b〉
（16）『宗骨抄』〈『真言宗全書』22・一八〇b～一八一a〉
（17）『宗骨抄』〈『真言宗全書』22・一八五a〉
（18）『仏頂尊勝心破地獄転業障出三界秘密三身仏果三種悉地真言儀軌』〈『大正蔵』18・九一三c〉
（19）『大毘盧遮那成仏神変加持蓮華胎蔵菩提幢標幟普通真言蔵広大成就瑜珈』〈『大正蔵』18・一四四c〉
（20）『摂大毘盧遮那成仏神変加持経入蓮華胎蔵海会悲生曼荼攞広大念誦儀軌供養方便会』〈『大正蔵』18・八五c〉
（21）『宗骨抄』〈『真言宗全書』22・一八五b〉

キーワード　一期終命の生死・刹那無間の生死・業報の依身・阿字本不生・ 字観